

2017年3月5日

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」 ヨハネ 3:16

「人生の重大事」を質問したくてやっ来たニコデモですが、素直には信じません。それでも主イエスは、何とかして救いに入れようとして語られます。

主はニコデモに、「わたしたちは知っていること…見たことを証ししている」として、「天から降って来た者」である自分が、「天上のこと」を語るのだから、「受け入れ」て欲しいと言われます。

聖書に精通した彼に対して、「モーセが荒れ野で蛇を上げた」話をし（→民数記 21 章）、十字架にかかって公衆の面前にさらされる主を信じる者は「永遠の命を得る」と約束されます。そこには「独り子をお与えになったほどに、世を愛された」神の愛（アガペー）があります。

「神が御子を世に遣わされた」目的は「世を裁くためではなく、御子によって世が救われるため」であり、すべての人を救いに招いておられるのです。救いという「光」が来たのです。「光よりも闇を好む」ような「悪を行う者」はともかく、「真理を行う者」であるニコデモのような人こそ「光の方に来る」べきです。

「独り子」を与えるほどの神の愛が強調されるのは、「人間は神に愛されていることを容易に納得しない」（カルヴァン）からです。主は天から「こよなき愛をたずさえ下」（讃 352 番）られました。

2017年3月12日

「上から来られる方は、すべてのものの上におられる。」 ヨハネ 3:31

洗礼者ヨハネが主イエスについて最後の証しをし、自分よりはるかに高い存在として紹介します（洗礼者の指！）。

「まだ投獄されていなかった」（→マルコ 6:17）ヨハネが、遺言のように弟子たちに語ります。主が「花嫁を迎える花婿」のように多くの人々と共におられることを知って、自分は「花婿の介添え人（友人）」として、「花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ」と語ります（主役を引き立てる脇役！）。

「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」という自分の立場を知っていて、身を引くのです。

自分は「地から出る者」として語るのですが、主は「上から来られる方」であるのに、「見たこと、聞いたことを証しされるが、だれも証しを受け入れない」（→3:11）のは何故か、それは昔も今も大きな疑問です（伝道の困難さ！）。

それでも主は、「神が“霊”を限りなくお与えになる」神の御子です。「天の父は、その霊の無限の豊かさを彼に注がれた」（カルヴァン）のですから、「その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確認した」ことになります（卒業証書を受け取る人のように！）。

洗礼者は主が「天から来られる方」だと賛辞を繰り返し、全世界に向かって、「主を崇めよ」（讃 162 番）と叫びます。

2017年3月19日

「あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」

ヨハネ4：10

3章のニコデモと対照的に、ここで登場するサマリア人の女性は堂々と社会の中で生きている人ではありませんが、主はそういう人も救いに入りたいのです。

アッシリアに占領されて混血が進んだためにユダヤ人から差別されていたサマリア人の町で、「イエスは旅に疲れて」休んでおられます。「彼は疲れたふりをされたのではなく、本当に疲れておられた」(カルヴァン) そこへ水を汲みに来た女性に、「水を飲ませてください」と頼まれます(伝道の姿勢!)

関心を持ったその女性に対して、主はご自分について、「神の賜物」(→3：16)として来た神の御子であり、「生きた水」を与える者だと宣言されます。彼女は、「どこからその生きた水を手にお入れになるのですか」と、自分たちの先祖ヤコブと比べて考えるようになります。

彼女の心の渇きを見て、主は「この水を飲む者はだれでもまた渇く」と、物質的な助けの限界を示し(→使徒3：6)、「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない」と約束され、彼女も求めます。

主は、「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」と言われます。「恵み深き主」に「生きた水」を求めましょう(讃525番)。

2017年3月26日

「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」

ヨハネ4：24

初対面であったのに、そのサマリア人の女性は少しずつ主イエスに対して心を開き、信じる者に変えられて行きます。

彼女は主を「まことの預言者」とします。主は「あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言って、「五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない」という彼女のありのままの姿を見抜き、助けようとされます(祈りを聞く主!)

さらに「まことの教師」とします。信仰生活について、主はていねいに教えられます。「わたしども(サマリア人)の先祖はこの(ゲリジム)山で礼拝したのに対して、これからはユダヤ人のようにエルサレムで礼拝すべきでしょうか。そうではありません。「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって(全人類の)父を礼拝する時が来る」のです。

遂には「まことのメシア」とします。彼女はとうとう救い主と出会ったのです(ルターの「塔の体験」!)。弟子たちも驚きますが、彼女は「水がめをそこに置いたまま」町の人々にその喜びを伝えます。「それはこの女の熱烈な思いを物語っている。」(カルヴァン)

「神は(時間・空間の制限のない)霊である」ので、全世界の人々と共に喜びを持って礼拝しましょう(讃354番)。